

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16715

研究課題名(和文) グロテスク文学としてのフランス16世紀前半の架空譚

研究課題名(英文) The "fabulous narrations" as grotesque literature in the first half of the 16th century France

研究代表者

岩下 綾 (IWASHITA, Aya)

慶應義塾大学・法学部(日吉)・講師

研究者番号：40633821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「グロテスク様式」がフランス16世紀前半の文学において果たした役割を、架空譚の読解を通して明らかにするものである。研究代表者は、フランソワ一世の文化政策をはじめとした政治的動向が、同時代の宗教事情と絡み合っ、どのように文芸作品に反映されているかを検討した。その結果を踏まえて、グロテスク様式に特徴的な怪物等の異形のものを、造形芸術と文学双方の理論に基づいて比較を行った。

研究成果の概要(英文)：This research examines the role of the grotesque style in the "fabulous narrations" in the first half of the 16th century France. We analyzed the manner in which literature reflected contemporary cultural policy adopted by Francois I and unstable religious situation. Furthermore, we compared the monsters, particular to the grotesque style, and to the "fabulous narrations", in terms of their structure and theory.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：フランス 16世紀 文学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでラブレ『第三の書』および『第四の書』を対象に行った文章技巧の分析を通して、作品の構造が当時のグロテスク装飾の理論に合致することを確認していた。また、ラブレ作品に少なからず影響を与えた同時代の作品においても、建築および造形芸術作品の描写や、作品構造の類似が見られ、芸術作品の描写が花開く「マニエリスム文学」の隆盛期より以前に、造形芸術作品を扱ったテキスト群が存在し、それらが「マニエリスム文学」とは一定の相違を保ちながら一つのジャンルを形成する可能性があると考えていた。

フランス・ルネサンスのグロテスク研究は、美術史の分野において精力的に進められており、文学においてはミハイール・バフチンがそのラブレ論のなかで論じているものの、造形芸術と文学の理論と実践を分野横断的に論じる研究は少ない。他方で、それらを扱ったマニエリスム文学研究は主に16世紀後半の作品を対象とするもので、上記の問題意識とともに、16世紀前半の一部の文学作品を、マニエリスムとの連続性の中で把握するという展望を持つに至った。

2. 研究の目的

(1) 装飾芸術のジャンルとしてイタリアではじまった「グロテスク様式」が、フランス16世紀前半の文学において果たした役割を、ラブレ作品を中心とする架空譚の読解を通して明らかにすることを主な目的とした。

(2) フランソワ一世の文化政策をはじめとした政治的動向が、同時代の宗教事情と絡み合っており、どのように文芸作品に反映されているかを、文体論を軸にして解読することを目指した。

(3) 複数のテキストを扱うための解読格子として、16世紀前半に用いられていた文章技巧理論(詩学、修辞学、論理学)のいくつかの用語概念をまとめる。その上で、同時代の建築・美術理論との比較を行い、共通項を洗い出すことを試みた。

(4) 日本におけるルネサンスおよびラブレ研究史を振り返ることにより、日本とフランスにおけるルネサンス文学の受容の比較を試みた。このことは、日本におけるルネサンス文学の普及と、フランスにおける日本のルネサンス文学研究の紹介に貢献することを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 本研究のコーパスとなっている16世紀前半のテキストは、少なからず現代校訂版

で出版され、またフランス国立図書館の電子資料プロジェクト(Gallica)やトゥール大学の人文主義ヴァーチャル図書館(BVH)により、相当数のものが電子化されている。それらを活用しながらも、2015年度はフランスおよびイタリアに滞在し、稀覯本、木版画や建築・造形芸術資料の調査およびフィールドワークを行った。それらの資料を用いて、本研究関連テキストの抽出、分類、読解を行った。

(2) 国内外で行われる研究会や学会に参加し、本研究に関連する分野の最新の研究結果を見聞すると同時に、研究代表者が単独で行う本研究に対して、各分野の専門家からの助言を得た。

例えば、2015年6月にパリ・ソルボンヌ大学で開催された「古代・近代の編集者としてのラブレ」、およびフランスとアメリカの16世紀研究者による共同研究会に参加し、テキストの文献学的アプローチのアップデートを図ると同時に、米仏両国の研究動向を概観した。

(3) 2016年度より、出産・育児およびその他の家庭的な事情により研究代表者の研究活動に大きく制限が課されたため、主にフィールドワークに関する計画に変更を余儀なくされた。その反面、当初より予定していたパリ・ソルボンヌ大学名誉教授ミレイユ・ユション氏の招聘事業を拡大し、研究代表者の所属大学のみならず、関西、九州においても講義・講演会を企画し、遂行した。その際に、M. ユション氏とともに現地の研究者との間で、ラブレ研究、ルネサンス文学研究、延いてはフランス文学研究に関する活発な議論を行った。

4. 研究成果

(1) 16世紀前半の文章技巧理論における「ファンタシア」の概念の調査と、架空譚における「異形のもの(こと)」の調査を行った。特に、文学においてグロテスク様式に深く関連する怪物あるいは異形のもの(こと)の描写を分析する手がかりとして、ラブレ『第四の書』から「奇妙な(estrane)」という語を抽出し、語の用法と概念の分析を行った。ラブレの後期作品においては、「奇妙な」と形容されるものが、視覚の問題に絡められており、それらは当時の宗教問題と密接に関係している。当時の政治宗教的問題とラブレがパピマーヌの島のエピソードで行った巧妙な暗喩の技法については〔学会発表〕において発表を行った。また、同じパピマーヌの島のエピソードにおける教皇の肖像画、教皇教令集についての視覚的演出、および初期キリスト教会の関係については〔学会発表〕で発表を行った。さらに、同じく「奇妙な」と形容されるカレームプルナ

ンの描写と、愚者トリプレの描写に関する「肖像」というジャンルと視覚の関係性については、〔図書〕の論文集に論文を発表した。

また、「ファンタシア」の概念の総括については、フランスの研究論集に成果を発表することを目指している。

(2) 16世紀に発掘され、「グロテスク様式」が流行するきっかけとなったネロの黄金宮（ドムス・アウレア）の遺跡（イタリア・ローマ）が、2016年に一時的に一般公開されたため、取材を行った。ガイドツアーのみの入場許可だったため、1週間の滞在期間中に3度訪れ、残存する壁画装飾や建物の構造等を撮影し、資料の収集を行った。16世紀人が実際に訪れることができた部位を調査し、彼らが残したグラフィティの一部を視察することができた。また、近年の研究で、もともと宮殿はシンメトリ構造になっており、八角形の部屋は饗宴の出し物のために床が回転する仕組みになっていたことが明らかになり、この構造自体が直接16世紀の架空譚に影響を与えたわけではなくとも、古代の建築物が16世紀人に与えたインパクトの大きさを推し量る重要な情報となった。

(3) 本研究のコーパスとなっている作品を、日本の一般の読者に対してより広く紹介することを試みた。例えば、コーパスのいくつかの小品集について、初学者のための概説を執筆し、慶應義塾大学通信教育部在籍者向けの文学史の教科書という形で出版した。（5．主な発表論文等〔図書〕）

さらに、日本の16世紀フランス文学研究およびラブレール研究の歴史を紹介するため、ラブレールの生地とされるシノン市（フランス）で開催された祭典において発表を行った。本発表では、ルネサンス文学研究者である渡辺一夫が第二次世界大戦中に行ったラブレール翻訳を扱い、現実と虚構の往来によるラブレールの創造性を受容した日本人の一例として、ラブレール作品という虚構を翻訳時の日本の現実へ導入する渡辺一夫の手法について論じた。（5．主な発表論文等〔学会発表〕）

この祭典には著名なラブレール研究者や多分野（映画、詩、哲学、戦争学等）の専門家が登壇しており、郷土史家や教員等を含んだ一般の聴衆とともに活発な議論を行った。特に、2017年の本祭典のテーマが「戦争」だったこともあり、研究代表者の発表は現地の人々の興味を引いたようだ。祭典の期間中、地元のテレビ局 France3 Centre-Val de Loire の取材班が撮影をしており、研究代表者もインタビューを受け、研究活動についての紹介を行った。

(4) ラブレール研究の大家、フランスのパリ・ソルボンヌ大学名誉教授であるミレイユ・ユション氏を招聘し、日本各地での講演会、講

義の企画と通訳を行った。（5．主な発表論文等〔その他〕、）の講義は、従来、17世紀に文学作品の「ジャンル」が認識されたと考えられてきたが、実際には16世紀の作家達の間ですでにその意識が芽生えており、当時彼らがどのように「書き物のジャンル(genre d'écriture)」を捉えていたかを明らかにした。「グロテスク様式」を文芸作品のジャンルとして捉えようとする本研究にとって、きわめて示唆に富む講義となった。また、ラブレール『第四の書』やフランチェスコ・コロナ『ポリフィロの夢』等のテキストを用いた講演において、M. ユション氏は、イメージを二重あるいは三重に重ねるというステガノグラフィの技法を駆使し、建築および造形芸術といった他芸術を作品に内在させたラブレールの手腕を明らかにした。本研究にとっては、他芸術と文学テキストとの有機的な結びつきを示す研究として非常に優れたモデルとなる講演であった。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 3件)

Aya IWASHITA, « Résister en compagnie de Rabelais : un humaniste japonais pendant la Seconde Guerre mondiale » (「ラブレールとともに抵抗する：第二次世界大戦中の日本人ユマニスト」), *Festival Nourritures élémentaires* (『基本の糧フェスティバル』), フランス、シノン, 2017年11月9-12日。(口頭発表・招待講演)

岩下綾, 「ラブレール『第四の書』パピマヌの島における隠蔽と解説」, ワークショップ「フランス・ルネサンス文学における隠蔽と解説」, 日本フランス語フランス文学会秋季大会、京都大学、2015年11月1日。(口頭発表)

Aya IWASHITA, « L' "étrange" dans le *Quart livre*, un essai de la lecture stéganographique » (「『第四の書』における「奇妙なもの」, ステガノグラフィ的読解の試み」), *La langue et les langages dans l'œuvre de François Rabelais, colloque international* (『国際学会 フランソワ・ラブレールの言葉と言語』), トリノ王立図書館 Biblioteca Reale di Torino・トリノ大学 Università di Torino、イタリア、トリノ、トーレ・ペリーチェ、2015年9月11-14日。(口頭発表・招待講演)

〔図書〕(計 2件)

岩下綾(共著)、片木智年編『通信フラ

ンス文学史 I』、「小話集」「ラブレール後期作品」、慶應義塾大学通信教育学部、2017年、p. 91-98, p. 106-114。

Aya IWASHITA-KAJIRO、《Quelques remarques sur les variations génériques dans les portraits de Triboulet et de Quaresmeprenant》（「トリブレとカレームプルナンの肖像におけるジャンルの変化についての考察」）、《Paroles dégelées》. *Propos de l'Atelier XVI^e siècle* (『「溶けた言葉」16世紀のアトリエ論集』)、Classiques Garnier、2016、p. 215-226。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

岩下綾（企画）、「ソルボンヌ大学名誉教授ミレイユ・ユション氏講義『パンタグリユエル』序文注解（Commentaire du Prologue du *Pantagruel*）」熊本大学文学部、2016年11月2日。

岩下綾（企画）、「ソルボンヌ大学名誉教授ミレイユ・ユション氏講演会 偉大なる建築家ラブレール（Rabelais en grand architecte）」、17世紀フランス研究会主催日本ロンサール学会協賛、アンスティチュ・フランセ九州、2016年11月1日。

岩下綾（企画・通訳）、「ソルボンヌ大学名誉教授ミレイユ・ユション氏講義 詩法：16世紀中葉の「書き物のジャンル」（Poétique : les “genres d'écrire” au milieu du XVI^e siècle）」、大阪大学言語文化研究科、大阪大学豊中キャンパス、2016年10月28日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩下 綾 (IWASHITA, Aya)
慶應義塾大学・法学部・専任講師
研究者番号：40633821

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()